

博士論文

アムステルダムにおけるリュリのオペラの組曲版

——楽譜出版者エティエンヌ・ロジェ（1665/66–1722）に関する歴史、文献、音楽面からの研究

七條めぐみ 愛知県立芸術大学大学院音楽研究科博士後期課程（音楽学）

要旨

ジャン・バティスト・リュリ Jean-Baptiste Lully（1632–1687）のオペラは 17 世紀のフランス音楽を代表するものとして、彼の生前から死後に至るまで高い知名度を誇った。その影響力はフランス国内だけでなく周辺諸国にも及んだが、中でもオランダは、フランスに次いでリュリのオペラの受容が進んで行われた地域だと言える。オランダは政治・外交面ではフランスと敵対関係にあったが、文化面ではフランス語文学、哲学、絵画を享受し、同時に発信もしていた。同様のことが音楽でも言え、リュリのオペラは 1680 年代から 1710 年代にかけて、アムステルダムやハーグの劇場でフランス語だけでなくオランダ語でも上演された。さらに、オペラがさまざまな形態で出版され、他の地域にはない独特のリュリ受容の様相を呈していた。

楽譜出版においては、アムステルダムのヨハン・フィリップ・フース Johan Philip Heus（生没年不詳）、アントワーヌ・ポアンテル Antoine Pointel（1660–1702）、エティエンヌ・ロジェ Estienne Roger（1665/66–1722）が中心となり、リュリのオペラのスコアや、声楽または器楽用の編曲版の出版に従事した。とりわけ、彼らが出版した器楽用エール集——いわゆる「組曲版」は、オペラの抜粋楽譜としてだけでなく器楽曲としても成立し、アムステルダムにおけるリュリのオペラ受容を特徴づけるレパートリーを形成した。組曲版はこれまでに、主にドイツの音楽学者シュナイダーによって、フランス・オペラとドイツの管弦楽組曲をつなぐ役割を果たすものとして評価されてきた。しかし、アムステルダムの出版者によるオペラの加工という観点からは、十分に考察がなされているとは言い難い。

本論文ではこの問題を扱う切り口として、アムステルダムの出版者ロジェの活動に焦点を当てる。ロジェはフランス・ノルマンディー地方のカンに生まれ、1695 年から 1722 年までの間に 600 点近くの楽譜や音楽理論書を出版した人物である。ロジェの出版活動の中ではこれまで、イタリア器楽作品の出版と国際的な楽譜販売が評価の対象となってきた。前者については特に、コレッリ Arcangelo Corelli（1653–1713）のソナタの再版や初版を手掛けたことから、コレッリ作品の受容と伝播において重要な役割を果たした人物と見なされてきた。後者に関しては、彫版印刷を用いて大規模な楽譜出版を行った最初期の人物として位置づけられ、出版物をアムステルダムだけでなく近隣諸国、特にロンドンに向けて販売していたことに注目が集まった。

一方で、ロジェがフランスのプロテスタント教徒（ユグノー）であり、彼の楽譜出版全体の約 3 分の 1 をフランス音楽が占めていたことは、あまり知られていない。そればかりか、ロジェによるフランス音楽出版は、パリの初版譜を無断で再版した、いわゆる「海賊版」として、後世の人々からは見向きもされなかったのである。上述したリュリのオペラの組曲版は、オペラ

の伝播と組曲史の観点から例外的に研究の対象となったが、組曲版がロジェの出版物全体の中でどのような意味を持つのか、また編曲を通じてどのような音楽的变化が生じたのか、詳細に検討する余地がある。

したがって本論文は、アムステルダムにおけるリュリのオペラの組曲版の特徴を、ロジェの生い立ちと出版活動、カタログを活用した楽譜販売、出版者によるオペラの加工に注目しながら明らかにすることを目的とする。

論文は3部から構成される。第1部ではロジェの生涯と活動を、ユグノー書籍商としての側面に注目して論じた。まず、ロジェに関する18世紀以来の先行研究の流れを辿り、イタリア音楽の出版を国際的な規模で行ったという評価が誰によって、どのような根拠をもとに下されたのかを整理した。続いて、17～18世紀のヨーロッパにおけるユグノーの立ち位置を検討し、ユグノーが離散を余儀なくされながら、国際的なネットワークを構築し、オランダにおいては比較的優遇された地位を得ていたことが見えてきた。また、出版業においてはアムステルダムの自由な環境にも助けられ、フランス語書物出版の立役者となっていたことが浮き彫りになった。第1部の後半ではこれらの社会背景を踏まえ、ロジェの経歴と活動を追った。ロジェは家族形成、組合加入、ライバル出版者との関係において、ユグノーのネットワークやアムステルダムの職業環境の恩恵を受けていた。また、ロジェが書籍商と協力しながら活動していたことから、彼の国際的な楽譜出版は、ユグノーのネットワークと書籍出版の販売手法が楽譜出版に応用された結果だと考えられる。

第2部ではカタログの分析を通じて、ロジェの楽譜出版の特徴を明らかにした。ロジェのカタログは楽譜に掲載されるもの(1696年～1701年)、書籍に掲載されるもの(1701年～1706年)、独立した出版物(1708年～1716年)に分けられ、これらの形態に応じて含まれる情報も変化する。また、1701年に始まる出版物の分類は、カタログを出版物のリストから、ロジェの意図を反映した宣伝媒体へと変化させた。その間カタログ上で目玉商品として扱われたのが、リュリのオペラの組曲版とコレッリのソナタだった。ただし両者は全く異なる目的を持ち、コレッリ作品では最新作を美しく正確に印刷することが重視されていたのに対し、組曲版では、既存のオペラを器楽曲の形に加工し、多数のレパートリーを誇るシリーズとして販売することに重点が置かれたと言える。

第3部ではロジェによるリュリのオペラの加工に注目しながら、組曲版の音楽的特徴を分析した。まず、組曲版はフランスにおけるオペラの抜粋楽譜と同様の成立過程をたどり、アムステルダムの先駆者たちのモデルに依拠するものの、イタリア風の4部編成と調性を基準とする構造において、独自のレパートリーを形成していることが分かった。続いて、組曲版の構造と声部書法の分析を行うことで、編曲の特徴を明らかにした。その結果、ロジェはリュリの5部編成によるオペラを4部編成の組曲へと変化させる過程で、調性や曲の性格を基準とする曲順の入れ換えと、中声部の追加や書き替えを行っていたことが見えてきた。

以上の考察を踏まえて、組曲版をロジェの人物・活動全体から捉え直してみると、リュリのオペラの組曲版は、フランスにルーツを持ちながら国際的に活動するロジェならではの発想に基づ

くものだと言える。同様に、カタログにおける組曲版の販売も、カタログの有用性を十分に理解した、ロジェの独創的な行いとして評価できる。

このようなロジェの独創性は組曲版の音楽的特徴からも指摘できる。すなわち、組曲版はその成立過程において、同時代のフランスにおけるオペラの抜粋楽譜と類似し、構造においてはドイツの管弦楽組曲と似ている。しかし、イタリア風の4部編成や、愛好家を念頭に置いた音楽の簡略化から、必ずしもフランス・オペラとドイツの組曲をつなぐのではなく、フランス・オペラにイタリア音楽らしさを付加し、ロンドンを中心とする国際市場に向けて売り出されたのではないかと考えられる。こうして、組曲版はロジェの商業的な手腕に支えられながら、リュリのオペラを器楽曲に変化させ、ヨーロッパ的な規模で広めるものだったと言える。

なお、筆者は愛知県立芸術大学とパリ＝ソルボンヌ大学のコチュテル（博士論文共同指導）に基づき、上記の内容に関する博士論文を日本語とフランス語で執筆し、両大学において博士号を取得した。